

『法華百座聞書抄』のテンス・アスペクト形式： 『今昔物語集』との比較

野田 高広 (国立国語研究所非常勤研究員) †

Tense/Aspect Markers in *Hokke Hyakuza Kikigaki Shō* and *Konjaku Monogatari Shū*

Takahiro Noda (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

1. はじめに

『法華百座聞書抄』(1110年成立)と『今昔物語集』(1120年以降成立)のテンス・アスペクト形式の比較考察を試みる。方法として、文体的にも近いと考えられる両資料について、アスペクト形式「たり」「り」「つ」「ぬ」にテンス形式「けり」「き」が後接する形式を抽出してその傾向の差に着目する。調査対象には「橋をひいたぞ、あやまちすな。」(平家物語・巻4)のような明確な「た」の例は現れないが、中古資料なども取り上げながら、衰退の途をたどる「けり」からテンス的意味を獲得しつつある「たり」への動態の一コマを、複合形式の傾向の違いとして記述する。いずれも国語研究所内で整備を進めているコーパスを利用して、『今昔物語集』は最古本である鈴鹿本を底本とする一部の巻(12; 27)を利用する。

2. 『法華百座聞書抄』について

2.1 言語資料としての『法華百座聞書抄』

『法華百座聞書抄』は、ある内親王の発願により1110年2月28日より300日間講じられた法華経・阿弥陀経・般若心経の説教の聞き書きであり、院政後期の抄写本(法隆寺蔵本)が唯一の伝本として現存する。法隆寺蔵本には300日間のうち、20日分の説教が筆録されており、計35の説話を含む。原文は片仮名を主体とした漢字片仮名交じり文であり、典拠の影響もあって漢文訓読語の影響が大きいとされる(アルイハ・カルガユエニ等)。また、下二段動詞に「り」が接続する例(アタへリ)や推量助動詞「う」(マウサウニシタカイテ)など中世語への過渡的な段階を示す例も少なからず見られ(cf. 小林 1975)、文体的な位置付けなど問題は多いながらも、日本語史資料として重要な文献であることに違いはない。

2.2 法華百座聞書抄コーパス

調査では、『法華百座聞書抄総索引』の本文編をテキスト化したものをXML形式でマークアップし、さらに形態素解析を施したものを使用した。また、『今昔物語集』は通時コーパスプロジェクトの一環として現在開発中のコーパス(テキストは小学館新編日本古典文

† maypole@gmail.com

学全集)を用いた。今回は比較的整備が進んでいる本朝仏法部の巻12と本朝世俗部の巻27を対象とした(いずれも鈴鹿本を底本とする)。表1に示すのはそれぞれの総語数(総短単位数)である。

表1 調査資料総語数

『法華百座聞書抄』		20053 語
『今昔物語集』	巻12	45038 語
	巻27	31164 語

3. 複合形式の一語化

通時的に助動詞「たり」は完了・存続を表すアスペクト形式だったのがテンス的な意味を獲得し単純過去を表すようになった(cf. 此島 1973: 183)。本節ではこの契機と考えられる助動詞の複合現象をあつかう。

3.1 山口堯二(2003)

山口(2003)は、アスペクト形式「つ」「ぬ」「たり」やテンス形式「き」「けり」から構成される古代語のテンス・アスペクト体系が「た」を中心とする中世以降の体系に推移する要因を、「ぬ」と「つ」の混同、および「てけり」などの複合形式の一般化に求める¹。

- (1) 「ふたたびは慈悲をもつて汝にあたへぬ。さのみは身の力なし。かなふまじ」(撰集抄・3・7)
- (2) 宇佐の宮に参り、千部の経を讀まむと、大願を立、七百余部はかきよみぬ。(幸若・百合若大臣)
- (3) 我も／＼とはせかさなり／＼、ほどなく一千余騎になりてけり。(金刀比羅本保元・上)
- (4) かの福田神の所為とさとりて、犬をおいのけつ。そのち気色なをりてけり。(古今著聞集・256)

(1)(2)は中世以前なら「つ」の選択が予想されるような例で、「与ふ」「書き読む」という人為的な動作を表す動詞に「ぬ」が選択されている。さらに、中世には(3)(4)のように、複合形の「てけり」には、本来なら「ぬ」が選択されそうな自然的な変化を表す動詞の前接例が目立つという。

- (5) 良ノ申ウケタマウニヨツテ、高祖ヲモ翼蔽シテ、タスケテアツタシ。(漢書抄・項籍伝・三23オ)
- (6) 只乘興而言タケルヤ(杜詩続翠抄・八31ウ)

さらに、(5)のような、中世以前の「たり」には見られない存在動詞への後接例などをあ

¹ フランス語の単純未来形 *je chanterai* や *ne V pas* の通時的変化に見られる fusion (融合; Hopper & Traugott 2003: 52-55, 65-66)も同様の現象だと考えられる (cf. 野田 2012: 92-97)。

げて、これらの「たし」や「たける」などの一体化した形式の出現を、「た」を中心とした近代語的体系への統合過程として捉えている。

3.2 アスペクト形式の「けり」後接傾向

山口(2003)に説かれる「た」への統合過程を確認するべく、『法華百座聞書抄』『今昔物語集』12,17巻のアスペクト形式「たり」「り」「つ」「ぬ」にテンス形式の「けり」「き」が後接する比率を調査した。参考として先に中古作品の状況を確認する。

3.2.1 中古作品の傾向

中納言日本語歴史コーパスを用いて、中古10作品の状況を調査した結果を示す。まず、表2は「たり」「り」「つ」「ぬ」のトークン頻度、および、それぞれの形式の使用率である。

表2 中古10作品のアスペクト形式のトークン頻度と使用率(トークン頻度/総語数*100)

	総語数	たり		り		つ		ぬ	
01竹取物語	10144	102	1.01%	59	0.58%	48	0.47%	108	1.06%
02古今和歌集	31017	76	0.25%	432	1.39%	75	0.24%	347	1.12%
03伊勢物語	13657	104	0.76%	110	0.81%	29	0.21%	180	1.32%
04土佐日記	6606	43	0.65%	107	1.62%	21	0.32%	69	1.04%
05大和物語	22878	258	1.13%	110	0.48%	74	0.32%	227	0.99%
06落窪物語	53952	653	1.21%	329	0.61%	340	0.63%	499	0.92%
07枕草子	64996	1544	2.38%	183	0.28%	292	0.45%	379	0.58%
08源氏物語	435893	4333	0.99%	3447	0.79%	1545	0.35%	3264	0.75%
09紫式部日記	17094	327	1.91%	86	0.50%	35	0.20%	76	0.44%
10和泉式部日記	10759	147	1.37%	21	0.20%	58	0.54%	133	1.24%
総計	666996	7587	1.14%	4884	0.73%	2517	0.38%	5282	0.79%

成立年代順に並べたが、取り立てて目立った傾向はない。以下の表3、表4に示すのはそれぞれのアスペクト形式の総数に対する「けり」「き」の後接数および後接率である。

表3 中古10作品のアスペクト形式の「けり」後接率

	たりけり		りけり		てけり		にけり	
01竹取物語	6	5.88%	1	1.69%	2	4.17%	15	13.89%
02古今和歌集	41	53.95%	61	14.12%	3	4.00%	93	26.80%
03伊勢物語	54	51.92%	42	38.18%	9	31.03%	88	48.89%
04土佐日記	0	0.00%	10	9.35%	0	0.00%	12	17.39%
05大和物語	149	57.75%	61	55.45%	17	22.97%	105	46.26%
06落窪物語	40	6.13%	16	4.86%	19	5.59%	51	10.22%
07枕草子	24	1.55%	8	4.37%	8	2.74%	49	12.93%
08源氏物語	116	2.68%	85	2.47%	80	5.18%	452	13.85%
09紫式部日記	6	1.83%	0	0.00%	1	2.86%	14	18.42%
10和泉式部日記	4	2.72%	0	0.00%	1	1.72%	18	13.53%
総計	440	5.80%	284	5.81%	140	5.56%	897	16.98%

表 4 中古 10 作品のAspect形式の「き」後接率

	たりき		りき		てき		にき	
	回数	割合	回数	割合	回数	割合	回数	割合
01竹取物語	3	2.94%	0	0.00%	4	8.33%	3	2.78%
02古今和歌集	0	0.00%	0	0.00%	10	13.33%	30	8.65%
03伊勢物語	1	0.96%	2	1.82%	1	3.45%	7	3.89%
04土佐日記	3	6.98%	2	1.87%	0	0.00%	1	1.45%
05大和物語	5	1.94%	0	0.00%	7	9.46%	12	5.29%
06落窪物語	24	3.68%	7	2.13%	6	1.76%	27	5.41%
07枕草子	50	3.24%	11	6.01%	3	1.03%	29	7.65%
08源氏物語	168	3.88%	124	3.60%	51	3.30%	298	9.13%
09紫式部日記	12	3.67%	1	1.16%	0	0.00%	5	6.58%
10和泉式部日記	3	2.04%	0	0.00%	2	3.45%	8	6.02%
総計	269	3.55%	147	3.01%	84	3.34%	420	7.95%

この2つの表の中で特に目を引くのが『古今和歌集』『伊勢物語』『大和物語』の「けり」後接率の高さである。3作品の特徴としては韻文的要素が強いということが挙げられそうだが、以下の表5のように、「けり」後接例は和歌や会話文よりもむしろ地の文に多く出現する。とりわけこの3作品の突出した数値については、文法的に説明できる問題なのか、個人的な文体差の問題なのかよく分からず断定は控えたいが、表6に明らかのように『伊勢物語』『大和物語』の「けり」の使用率は他の作品に比して極めて高く、両者は『源氏物語』の5倍以上の比率を示す。このことが大きく関わっていることは確かであろう。

概して、中古和文作品では「たり」「り」「つ」への「けり」後接率が10%を切る作品が大半であり、3作品を除き、それほど強い後接傾向は見られないことが確認できる。また、「ぬ」の「けり」後接例は「つ」に比して若干多いようだが、せいぜい10%台にとどまるものが大半となっている。

表 5 「けり」後接：本文種別集計

作品名	歌			歌 集計	会話		会話 集計	詞書				詞書 集計
	たり	つ	ぬ		たり	ぬ		たり	つ	ぬ	り	
02古今和歌集		1	49	50				36	2	31	58	127
03伊勢物語			14	14		1	1					
05大和物語	2		9	11	1	1	2					
総計	2	1	72	75	1	2	3	36	2	31	58	127

作品名	手紙		手紙 集計	地				地 集計	総計
	たり	ぬ		たり	つ	ぬ	り		
02古今和歌集				5		13	3	21	198
03伊勢物語		1	1	54	9	72	42	177	193
05大和物語	1		1	145	17	95	61	318	332
総計	1	1	2	204	26	180	106	516	723

表 6 中古 10 作品「けり」使用率（「けり」総数／総語数＊100）

作品名	総語数	「けり」総数	使用率
01竹取物語	10144	111	1.09%
02古今和歌集	31017	764	2.46%
03伊勢物語	13657	668	4.89%
04土佐日記	6606	81	1.23%
05大和物語	22878	1288	5.63%
06落窪物語	53952	511	0.95%
07枕草子	64996	346	0.53%
08源氏物語	435893	3635	0.83%
09紫式部日記	17094	80	0.47%
10和泉式部日記	10759	68	0.63%
合計	666996	7552	1.13%

3.2.2 『法華百座聞書抄』と『今昔物語集』の使用状況

表 7 に『法華百座聞書抄』の「たり」「り」「つ」「ぬ」のトークン頻度および使用率を示す。

表 7 アスペクト形式のトークン頻度と使用率（トークン頻度／総語数＊100）

	総語数	たり		り		つ		ぬ	
法華百座	20053	106	0.53%	135	0.67%	60	0.30%	82	0.41%
今昔12	45038	233	0.52%	201	0.45%	84	0.19%	202	0.45%
今昔27	31164	478	1.53%	38	0.12%	153	0.49%	291	0.93%

先の中古 10 作品と比較して顕著な傾向は見られないが、『今昔物語集』巻 27 での「り」の数値が低い点が指摘できる。これは和文体的性質が色濃いとされる本朝世俗部の巻であることも無関係ではないだろうが、中古和文作品では「給ふ」の前接例の数が際立っており、たとえば『源氏物語』では「り」3447 例中の 2621 例を「給ふ」前接形が占める。一方、『今昔物語集』の巻 12 では 201 例中の 31 例、巻 27 では 38 例中での 3 例と、「給へり」という複合形が減少傾向にある。このように、中古和文作品での「り」の頻度の高さは「給ふ」前接形の数値の影響を受けており、表 7 から『法華百座聞書抄』や『今昔物語集』において「り」が減少したとはいうことはできない。

以下、表 8・表 9 に示すのは「けり」「き」の後接率である。

表 8 アスペクト形式の「けり」後接率

	たりけり		りけり		てけり		にけり	
法華百座	11	10.38%	2	1.48%	2	3.33%	11	13.41%
今昔12	6	2.58%	3	1.49%	5	5.95%	18	8.91%
今昔27	126	26.36%	8	21.05%	28	18.30%	120	41.24%

表 9 アスペクト形式の「き」後接率

	たりき		りき		てき		にき	
法華百座	4	3.77%	6	4.44%	1	1.67%	0	0.00%
今昔12	7	3.00%	5	2.49%	0	0.00%	6	2.97%
今昔27	6	1.26%	1	2.63%	1	0.65%	8	2.75%

表 8 の『今昔物語集』巻 27 の数値が際立っていることが分かると思う。巻 27 はすべての形式において中古和文作品全体の数値を大きく上回っており、『法華百座聞書抄』や巻 12 とは傾向を異にしている。先述の通り巻 27 は和文的特性が強いとされる本朝世俗編に属する巻であり、「けり」後接形の比率の増加は、山口 (2003) の「一体化」が進行するさまを表していると考えてよいだろう。一方で、数値の少なさはともかく、『法華百座聞書抄』の示す数値は『今昔物語集』巻 12 や一部を除く中古和文に近い傾向を示している。

表 9 の「き」後接例は用例数も少なく、あくまで参考にとどめざるを得ないが、「たりき」「りき」の例は先掲の(5)のような、室町期に現れる「たし」へと継承されていく形式だと考えられる。以下、参考に「たりし」と「たりけり」の例を示す。

- (7) 「…をもひかけぬ國の亂いできたりしに、まどはしてその行方をしらず」(法華・オ 498)
- (8) 「…母の胎より生れ出ける時に、左の手に捲て生れたりけるを、母の此のごとく申て得しめたりし也。…」(今昔・12-34)
- (9) 身の才微妙く、心賢く御ければ、世の人、賢人の右の大臣とぞ名付たりし。(今昔・27-19)
- (10) おもひもあへず、「阿彌陀佛」といはれたりけるをききて、この魚のわがかたにかへりてきければ…(法華・オ 271)
- (11) 其の鯖荷たりける杖、今に御堂の東の方の庭に有り。(今昔・12-7)
- (12) 其の時に寝殿の辰巳の母屋の柱に、木の節の穴開たりけり。(今昔・27-3)

3.3 前接動詞の傾向

「つ」「ぬ」は中古作品では動作の意図性に対応した強い選択傾向があったのが、時代を下るに従い例外的なものが現れるようになる。3.1 で述べたように、山口 (2003: 230-231) は「てけり」などの複合形において両者の混同例が顕著である点を指摘しており、本節では山口 (2003) の挙げる例 ((1),(2)など) より若干時代をさかのぼる『法華百座聞書抄』および『今昔物語集』巻 12, 27 の実態を確認したい。

3.3.1 「て-けり/き」

『法華百座聞書抄』の「てけり」は山口 (2003) で示されたような混同例は存在しないようであり、以下のように「てけり」は意図的な動作を表す動詞句に後接する。

- (13) …あかつきにのみかくいひゐたらむ、はづかしきことなりと思て、高きいはほのうへにいたりて身をなげてけり。地獄に率ていかされて、獄卒、此の僧をかなへにうちいれつ。(法華・オ 183)

(14) 弟子、五躰を地になげてをがみたてまつりて、それよりなむ深く信じてさとりをひらきてける。はふせん大師は、わが山王院の大師にまします。(法華・オ 357)

(15) 此の佛の功德、大概さきざき申てしかば、何ごとをか申候べからむ。(法華・ウ 112)

一方の『今昔物語集』では(18)のような、「命を失ふ」という非意図的な事態の「てけり」後接例が存在するが、このような例は他には見られないようであり、大勢としては中古作品と近い傾向を示す。

(16) 「前に別れ去にし僧の、此の山に入行ひける間、生死を厭て身を投てける也」(今昔・12-31)

(17) 遠助、「哀れ、『見まじ』と云てし物を。不便なる態かな」と云て…(今昔・27-21)

(18) 嫉妬の故に遠助思懸ず、非分に命をなむ失ひてけり。(今昔・27-21)

3.3.2 「に-けり／き」

『法華百座聞書抄』に「にき」は見られなかった。「にけり」も中古和文と似通った傾向を示しており、非意図的な動詞への後接例が大半を占める。(22)の「参る」は『源氏物語』などの平安中期の作品では「つ」「ぬ」のいずれも後接する動詞であり、やはり例外的なものは見られない。

(19) 此は法花寺のあかつきのかねの聲と思て、我懈怠しにけりとおどろきて…(法華・オ 186)

(20) わがころもをとらへさせて、ほどもなくゆきつきにけり。(法華・オ 238)

(21) …ひじりをおがみてなむさり給にける。(法華・オ 261)

(22) 魚とらむために三年ばかりがほどよるひる念佛をしけるは、みな極樂へまいりにけり。(法華・オ 276)

(23) しまのうちにひとりものこらず往生しにければ往生のしまとなむいひ…(法華・オ 277)

(24) 「かずもしらずも、ひさしくもなりなりにけるかな」とかなしくをぼえて…(法華・オ 290)

(25) 嚴をみるに、とひたてまつらむとをもひつることもわすれにけり。(法華・オ 394)

(26) 師子、酒をほしきままにのみて、ゑひてねにけるをみて…(法華・ウ 175)

(27) 給へりしに、佛になり給ひて、すでに十劫はすぎ給ひにければ…(法華・ウ 379)

『今昔物語集』の「にけり／き」にも取り立てて例外的なものは見られず、「知る」「失す」などの非意図的な動詞句に後接するもの、もしくは移動動詞などのような「つ」「ぬ」両例にまたがる動詞句の例しか見られないようである。

(28) 「隠れ得たりと思ふ穴をも知にけり」と書生思ふ程に…(今昔・12-28)

(29) 其の中大夫、従者一人を具して、我れは胡録搔負て出にけり。(今昔・27-37)

(30) 「…其の御前にして維摩経を讀誦せしかば、即ち癒にき。」(今昔・12-3)

(31) …病付て有しを、繚ふ人も無くて、此の夏失にしを…(今昔・27-24)

4. 結論

以上、『法華百座聞書抄』のテンス・アスペクト形式の複合形式「てけり」「たりけり」などに焦点を当てて考察をしてきた。3.2.2の表8に示したように『今昔物語集』の巻27では「たりけり」「てけり」などのような「けり」の強い後接傾向が確認できたが、『法華百座聞書抄』は『今昔物語集』巻12と似通った傾向を示しており、さらに、中古和文作品で見られた傾向と大きな違いは確認できなかった。また、山口(2003)で指摘された、「つ」「ぬ」の前接動詞の混同は調査対象にはほとんど見られないことを確認した。

中世資料的な性質を備える『法華百座聞書抄』はテンス・アスペクト形式の複合の様相をみる限りは平安中期の性質を温存すると考えられ、それは和漢両文脈の性質を兼ね備えるとされる『今昔物語集』巻12の状態に数値的には近い。一方、和文脈的な傾向が強いとされる『今昔物語集』の巻27は明らかにアスペクト形式への「けり」の後接率が高いのであり、「たりけり」のような複合形の増加を、「た」などを中心とした新しい体系への萌芽とみるのは山口(2003)に説かれたとおりである。

謝辞

本研究は日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「和漢の両系統を統合する平安・鎌倉時代語コーパス構築のための語彙論的研究」(24320086、研究代表者: 田中牧郎)による成果の一部です。

参考文献

- 此島正年(1973)『国語助動詞の研究』桜楓社。
- 小林芳規(編)(1975)『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院。
- 小林芳規(1975)「国語史研究資料としての『法華百座聞書抄』」小林芳規(編)『法華百座聞書抄総索引』, 557-558. 武蔵野書院。
- 坂詰力治(1975)「法華百座聞書抄における助動詞について」小林芳規(編)『法華百座聞書抄総索引』, 611-628. 武蔵野書院。
- 築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会。
- 野田高広(2012)「アスペクト形式「ている」の成立について」『東京大学言語学論集』32, 85-107.
- 山口堯二(2003)「完了辞・過去辞の通時的統合: 「たり>た」への収斂」『助動詞史を探る』, 225-242. 和泉書院。(初出: 川端善明・仁田義雄(編)(1997)『日本語文法: 体系と方法』, pp. 211-227. ひつじ書房。)
- 山下和弘(2013)「『今昔物語集』に見られるテアリとタリの対比: 「テアリ対タリ」「テアリケリ対タリケリ」」『国語国文学研究』48, 37-51.
- Hopper, Paul J., & Traugott, E. C. (2003). *Grammaticalization* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.